

大分市 市内遺跡確認調査概報

— 2008年度 —

国指定史跡大友氏遺跡

大友氏館跡第21次調査

旧万寿寺地区第5次調査

中世大友府内町跡第82次調査

城原・里遺跡第12次調査

千代丸古墳第1・2次調査

2009

大分市教育委員会

大分市 市内遺跡確認調査概報

— 2008年度 —

国指定史跡大友氏遺跡

大友氏館跡第21次調査

旧万寿寺地区第5次調査

中世大友府内町跡第82次調査

城原・里遺跡第12次調査

千代丸古墳第1・2次調査

2009

大分市教育委員会



調査遺跡位置図 (1/40000)

例 言

1. 本書は平成20年度に大分市教育委員会が実施した市内遺跡確認調査の概要報告である。
2. 本書には国指定史跡大友氏遺跡（大友氏館跡・旧万寿寺地区）、中世大友府内町跡、城原・里遺跡、千代丸古墳の調査成果を収録した。
3. 発掘調査の費用は、国と県から補助を受けて、大分市が負担した。
4. 遺構の写真撮影は、各担当者が行った他、空中写真に関しては㈱九州航空に委託した。
5. 出土遺物の整理は、長直信、古川匠の他、中山麻理子、佐藤良子、秋山かおる（大分市教育委員会文化財課臨時職員）が主としてこれにあたった。
6. 本書に用いた方位はすべて座標北（G. N.）である。また、基準点の座標値は大友氏遺跡、中世大友府内町跡については国土座標第Ⅱ系（旧日本測地系）その他を、平面直角座標2系（世界測地系）による。
7. 本書に用いた出土遺物の分類及び年代観は以下の文献を参考にしている。

中西武尚「大友氏館跡北東部地区の遺構変遷と出土土師器」『大分市市内遺跡確認調査概報－2004年度－』

大分市教育委員会2005

太宰府市教育委員会『大宰府条坊XV－陶磁器分類編－』2000

乗岡実「備前」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相－生産技術の展開と編年 資料集』2005

8. 本書で用いた遺構略号は原則として、SB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、SX：性格不明遺構（整地層など）を示す。
9. 本書で使用した遺跡名の略記号は以下の通りである。
大友氏館跡－「館」 旧万寿寺地区－「万」 中世大友府内町跡－「町」 城原・里遺跡－「城」
千代丸古墳－「千代丸」
10. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。

館	21	SB	140
遺跡名	調査次数	遺構種別	遺構番号
11. 出土遺物、記録資料は大分市文化財資料室（大分市顕徳町3丁目2番43号）に收藏、保管している。
12. 本書の執筆は長・古川が所任、長が編集した。
13. 調査体制については次のとおりである。

大分市教育委員会教育長 足立 一馬

文化財課

次長兼課長	玉永 光洋	
参事	岩田 祐治	
管理係 課長補佐兼係長		福田 誠一
主査	幸 俊昭	桑原 治
	筒井 和信	
指導主事	姫野 公徳	植木 和美
主任	栗田 博之	加藤 キヌ
	竹中 智美	宮崎 勲

文化財係

課長補佐兼係長		塔鼻 光司
専門員	坪根 伸也	池邊千太郎
主任技師	塩地 潤一	河野 史郎
	高島 豊	中西 武尚
主任	永松 正大	
主事	佐藤 道文	五十川雄也
	古川 匠 (調査・整理)	
	長 直信 (調査・整理・編集担当)	
嘱託	井口あけみ	奥村 義貴
	羽田野達郎	三嶋 桂司
	羽田野裕之	若林 善満
	山下 朋紀	上原 翔平
	仲町 憲治	五十川慎也
		廣瀬 育子

大分市歴史資料館

参事兼館長

課長補佐兼副館長

副館長	後藤 典幸
主査	広岡 道代
	武富 雅宣
指導主事	甲斐 猛
研修教諭	瀧口 佳代
事務員	仲矢 咲紀
嘱託	古瀬 美鈴
	通山志賀子
	北原 洋之

讃岐 和夫
久多羅岐明

安部 幹夫

大平 直子
細井 雅希
安部 和広

目次

第1章 国指定史跡大友氏遺跡

1. はじめに	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査組織	1
2. 大友氏館跡第21次調査	
(1) 調査目的	2
(2) 調査結果	2
(3) 調査概要	4
(4) 調査のまとめと今後の課題	9
(5) 出土遺物について	9
3. 旧万寿寺地区第5次調査	
(1) 調査目的	12
(2) 調査結果	12
(3) 調査概要	13
(4) 調査のまとめと今後の課題	13

第2章 中世大友府内町跡第82次調査

1. 調査に至る経緯	18
2. 調査概要	18

第3章 城原・里遺跡第12次調査

1. はじめに	20
(1) 調査に至る経過および調査の目的	20
(2) 調査組織	21
2. 調査概要	21
3. 調査のまとめと今後の課題	21

第4章 千代丸古墳

1. はじめに	23
(1) 調査に至る経過	23
(2) 調査組織	23
2. 歴史的環境	24
3. 調査報告	25
(1) 平成19年度の調査 (第1次)	25
(2) 平成20年度の調査 (第2次)	28
4. まとめ	31
写真図版	35

第1章 国指定史跡

大友氏遺跡[大友氏館跡・旧万寿寺地区] (発掘調査概報X)

1. はじめに

(1) 調査に至る経過

本年度の大友氏関連遺跡の確認調査は、大友氏館跡－1地点、旧万寿寺地区－1地点である。

大友氏館跡は、東側外郭施設とその周辺の様相把握を目的に、16世紀後半の府内のまちを描いたとされる「府内古絵図」で大友館に表現された大門の存在が想定される館中央東端を調査地点とした。

旧万寿寺地は、昨年の4次調査で確認した掘り込み地業状の遺構の南北範囲と東端の範囲を確定させることを目的に調査をおこなった。

(2) 調査組織

調査指導者

河原 純之 (前川村学園女子大学教授)

後藤 宗俊 (別府大学教授)

小野 正敏 (国立歴史民俗博物館教授)

坂井 秀弥 (文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官)

渋谷 忠章 (前大分県歴史博物館館長)

調査指導

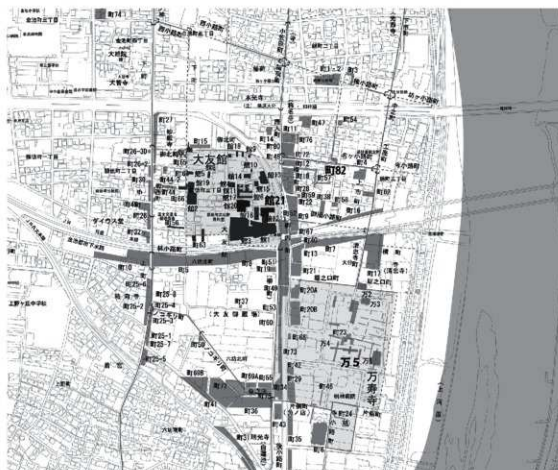
大分県教育委員会

調査主体

大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

調査担当

長 直信



第1図 大友氏遺跡・中世大友府内町跡調査地点と府内まち復元想定図 (1/8000)

2. 大友氏館跡 第21次調査

(1) 調査目的

推定大友氏館跡の中央部東端にあたる東西に長い地割り2つ分をまたぐ位置に所在する(第2図)。調査期間は平成20年5月26日から8月26日。調査面積は532㎡である。これまでの調査同様、館の規模が最大となる16世紀後半の館内部の様相を把握することが主目的であることに変わりはないが、当調査区の南側に接する12次調査、西に接する16次調査の所見・課題をふまえて、今回の調査では以下の4点を調査目的とした。

- ①【16世紀中頃から後半の遺構の展開】調査区は大友館東端に位置することから、外郭施設の存在が想定される地点といえる。16世紀後半の府内のまちを描いたとされる「府内古絵図」で大友館に表現されている大門の存在が想定され、館東端の様相を確認する必要がある。
- ②【15・16世紀の整地の展開と旧地形の復元】17・20次調査で確認されている15世紀代の厚い整地の延びが、東側にどの程度まで展開するのかを確認する。同様に、館中心部に連なる整地の高まりが、調査区内まで延びるのかを確認する。
- ③【15世紀の遺構の展開】12次調査で確認した15世紀の掘立柱建物群の北側の展開を確認する。
- ④【16世紀末以降の遺構の展開】12次調査では、16世紀末(府内の町復興後〔1587年以後〕)の町屋に付随すると考えられる井戸を確認したことから、館東側は復興後に町屋化したと解釈されている。今回の調査区でも同様の所見がえられるのか遺構や整地の有無により確認する。

(2) 調査結果(第4図)

- ① 16世紀中頃～後半の備前焼大裏埋設遺構である館21SX220を検出。内面に付着する白色物質や埋土中で出土した白色の固形物の存在からトイレ遺構(小使用か)の可能性があり(現在分析中)、館東側の空間利用の具体相を知るうえで重要な成果といえる。



第2図 大友氏館跡周辺の調査状況(1/4000)

『大分市史』中巻 付図Ⅱ「戦国時代の府内復原想定図」を基本に発掘調査地点・地籍図を重ねた。

- ② 16世紀後半の焼土堆積遺構である館21SX105を館21SX220上面で検出。威信財的な要素をもつ陶磁器類が複数廃棄される他、鉄釘・青銅製の三結所型の目貫金具などの青銅製品、銅銭など、これまでの調査で僅かにしか検出されていなかった遺物がまとまって出土している。大友館が焼亡した天正14年(1586)の戦災後、町屋化の際の片付けに関わる遺構の可能性がある。なお、調査区東端は、16世紀末の大型遺構(館21SX100・館21SX045)が調査区外へ伸びており、館の外郭となるような遺構は検出できなかった。ただし、当地はこれまでの館の調査と比較して瓦の出土が集中する地点であり、付近に瓦を用いた遺構(館の門構造に関連か?)の展開が想定される。また、調査区内では帰属時期不明の礎石(飛び石?)群や、館21SX220や館21SX105を除いて、16世紀後半の遺構は確認できなかったことから、調査区は、16世紀代の「ある程度深さをもつ

[illegible][illegible]

●第17次調査 (2005~6年度)

大友館東外郭推定ライン

第二南北街路

桜町

●第21次調査区

管状土坑(SX220)
築の機能停止後のごみなどに
粘土を盛埋(SX100)で
形成される

SX080: 南風土坑(10世紀末)
SX140: 竪穴建物(15世紀)
SX100: 竪穴建物(16世紀)
SD170: 溝(15世紀)
SD170: 溝(15世紀)
竪穴建物跡(15世紀)
井戸(16世紀)

●第16次調査 (2004~5年度)

●第20次調査 (2007年度)

庭園

●第12次調査 (2002年度)

●第1次調査 (1998年度)

●第3次調査 (1999年度)

御内町

町52次調査区

—3—

遺構」の希薄性が指摘できるエリアであったという。すなわち、館14・15・17・20次のような大形廃棄土坑や深い溝（「廃棄空間」や「区画」を明示する遺構）などは展開しておらず、「礎石の建物」が展開していた」もしくは「空地であった」可能性がある。

③館中心部よりつづく15世紀代の整地層を確認。また、15世紀代の掘柱建物跡を複数検出。館中心部から東側にかけて面的な整地を行い、その整地に付随して礎盤石を使った掘立柱建物跡が規格性をもって展開することを追認する結果となった。

④16世紀末の廃棄土坑や道路状？遺構を検出。これらの遺構からは一定量の瓦が出土した。12次調査同様、館の東端の一部は、第2南北街路より西に40m付近まで町屋的な遺構が展開したことが判明。また、21次調査の50m北側にある15次調査では第2南北街路より西に約60m、館北側外郭ラインより南に約60m付近でこの時期の井戸が形成されており、館東側の町屋域の西限がほぼ確定したこととなる。

③ 調査概要

■基本層序（第3図）

近代の宅地造成土を除去すると耕作跡が凹凸をもって堆積し、北側の一部では東西方向に深い耕作跡がみられる（これらの凹凸をもって調査区全面に堆積する土を「茶色土」とした）。遺構は、標高4.8～4.7mで検出された。この遺構面は「茶褐色土」ないし「灰褐色土」とした15世紀代の土師器片を含む整地が基礎となる。整地面より切り込む遺構は、館21SX080のような16世紀末段階の遺構、掘立柱建物館21B140や大型遺構館21SX090などの15世紀代ものがある。「茶褐色土」下層の遺構は、調査区南側で東西溝館21SD170が検出される他、調査区北側には南北方向の幅の広い溝状の遺構館21SD305が展開する。「茶褐色土」層の下には館中心部に位置する17・20次で検出される遺物をほとんど含まない「黄色土」が10cm程薄く面的に堆積し、その下層には「黄灰色土」が厚く堆積する。「黄灰色土」は中世段階の基盤層と考えられる。

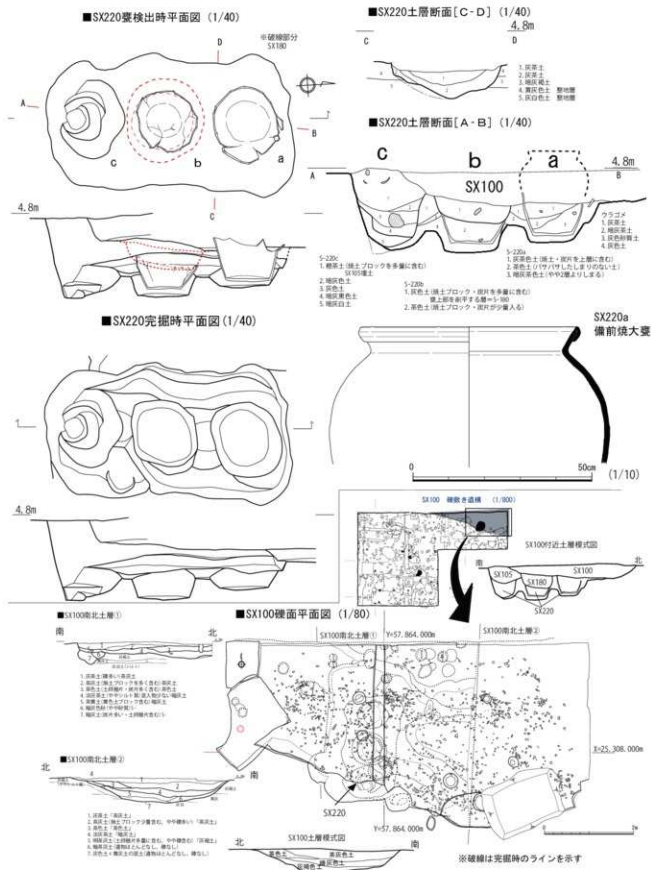
■各時期の主要遺構（第6・7図）

【16世紀末】

調査区中央北側で東西6m、南北3.5mの楕円形の遺構「館21SX080」を検出。コンテナ2箱程度の瓦類を含む16世紀末の遺物が拳大の礫とともに大量に出土した。また、調査区北東端には、焼土堆積遺構館21SX105および備前焼大甕埋設遺構館21SX220を削平して館21SX100とした堆積土上面に礫を伴う大型遺構が展開する（第5図下）。館21SX100は調査区東端から北西方向へ伸びており、それぞれ調査区外へ広がるようである。また、東端では、調査区外南東方向へ伸びる性格不明遺構（溝か？）館21SX045を切る。硬化した土層面は検出されないが上面に一定量の礫が帯状に分布することから、最終遺構面は通路などの施設として使用された可能性がある（後述するが、遺構検出面は当時の地表面を留めている可能性が高く、礫面は地表に露出している状況と推測される）。館21SX100は、館21SX105との切り合いや出土遺物から16世紀末頃以降と考えられるが、食器様相からは17世紀代までは下らない。埋土には館21SX105や館21SX220に由来する多量の焼土層や高級陶磁器片、備前焼大甕片が含まれ、その多くが接合する。館21SX045は16世紀末頃の遺物とともに、軒平瓦片が1点出土している（第6図参照）。また、館21SX100周辺には直径2mに収まる円形、ないし楕円形プランとなる深さ10cmほどの浅い遺構が複数展開する（館21SX070、館21SX110、館21SX065、館21SX040）。

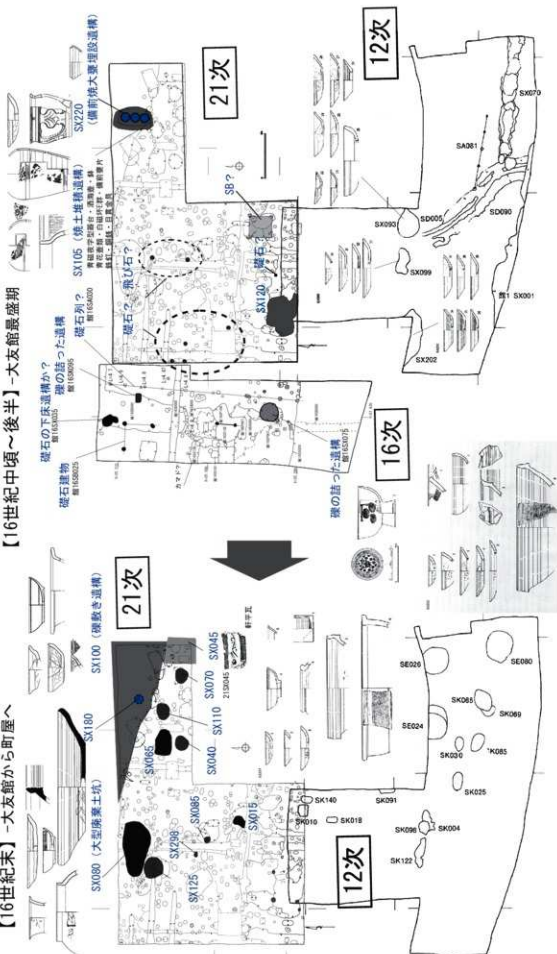
【16世紀中頃から後半】

明確な遺構は、調査区東端で検出した備前焼大甕埋設遺構「館21SX220」、および焼土堆積遺構館21SX105のみである。館21SX220は備前焼大甕を2個体（内、館21SX220 aは中世6a期の型式）を埋設した遺構（第5図上、写真5・7）。掘方は不整形な長方形を呈し、東西1.5m、南北2.7mを測る。南側の円形プラン（館21SX220 c）には甕の痕跡は確認できず有機物の遺存も確認できていない。土層観察からは、a～cの3つの遺構は同時に埋められているが、bは館21SX180とした円形プランの遺構成形時に甕の上半部が削平されている。館21SX105は、館21SX220 cの最終埋没時に堆積した高級陶磁器片や壁土、多量の焼土を含んだ層。北側を館21SX100により削られているため、堆積層の範囲は確定できなかったが、館21SX220aや



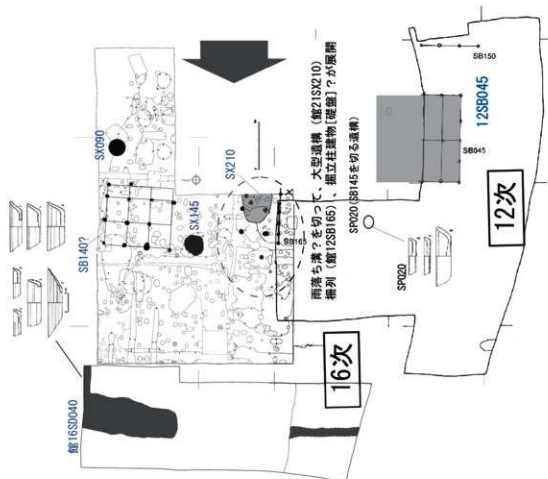
第5図 館21SX100及びSX220個別図 (1/40・1/80)

【16世紀中頃～後半】-大友館最盛期



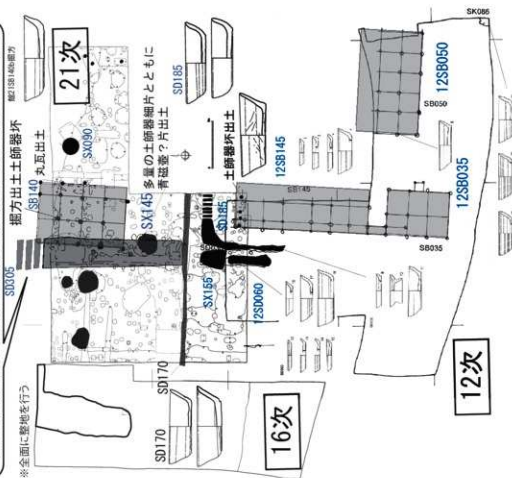
第6図 館東側の遺構変遷図① (1/400)

【15世紀後半頃】



【15世紀前半頃】 -大友館形成期?

15世紀代の遺構が展開する整地層を除去すると検出できる。時期を確定できるほどの遺物は出土しないが、調査区で最も古い遺構と考えられる。南側への延びは調査区中央付近までしか確認できていない。



第7図 館東側の遺構変遷図② (1/400)

館21SX220bの上層は焼土を多く含むことから、本来は館21SX220の埋没途中に形成された遺構と推定される。焼土中には、多量の壁土とともに夜学型器台をはじめ、酒海壺、鉢などの青磁類、青花の酒海壺、梅瓶片など、唐物或信財とよばれる器種が出土した他、鉄釘、三鈷杵型の目貫金具などの青銅製品、銅銭などが出土している。また、炭化した米（粳穀付）が幅6cm×4cm、厚さ2.5cmほどの塊になって出土するなど有機物の出土も注目される（土は全てサンプルし、現在水洗・乾燥・選別中）。なお、調査区東端は、16世紀末の大型遺構（館21SX100・館21SX045）が調査区外へ伸びており、館の外郭となるような遺構は検出できなかった。

【15・16世紀の整地の展開】

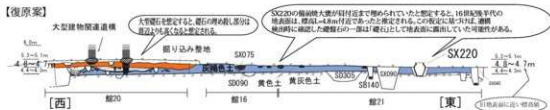
基本層序（第3図）で示したように、当調査区は20次や17次でみられた15世紀代の大規模な整地が館東端にも及んでいることが判明し、この時期の面的な造作を再確認することができた（写真12・13）。なお、調査終了時に東西にトレンチを入れ、堆積状況を確認したが、館中心部でみられた16世紀代の整地痕跡は確認できなかった。館中心部の調査所見では基本的に整地に伴って建物遺構が展開するような状況、すなわち「整地」と「建物遺構」がセットとなっていることを考えると、今回の調査区では明確に16世紀代の建物遺構が検出できておらず、整地層は当調査区までは及んでいない可能性がある。しかしながら、礎石建物にともなう浅い整地が存在した場合は、近世以降の耕作土により全て削平されていることも考えられ検討の余地はある。14世紀の遺構についてもトレンチや大型遺構の断面観察では確認できない。層位的には館21SD305とした溝状遺構が調査区最古段階の遺構と考えられるが（写真11）、出土遺物は非常に少なく帰属時期の分かる遺物は出土していない。

【15世紀の遺構の展開】

調査区北側中央部で礎盤石をもつ掘立柱建物跡「館21SB140」を検出。整地土「茶褐色土」上面より掘削される。礎盤石の上面レベルに大きな差が見られるため、同地点での建物の建替えの可能性も考えられたが、その痕跡は見られなかった。柱穴掘方中にはほぼ完形となる15世紀代の土師器環が出土している（第10図32）。12次の掘立柱建物跡の柱間が約2.1m（7尺基準）であるが、当遺構は約2.4mとなりやや幅が広い。また、調査区南側で礎盤石をもつ並びがあるほか、12次調査で検出した建物に続く柱穴が検出されている。12次調査では、建物に伴うと想定している南北方向の雨落ち溝（炭片や土師器を多く伴う）がみつかった。21次南側でこれに類似した埋土の遺構館21SX155を検出したが、遺構の南端は、12次の遺構とは接続せず、別遺構として南北方向のプランをもって展開する。東側の雨落ち溝「館21SD185」については、21次まで延びており途中で東に折れるようである。どこまで東に延びるのかは館21SX210に切られているため不明である。

調査区北側では、館21SX100に切られる直径1.7m程の円形遺構「館21SX090」を検出。橙色系の土師器片しか出土していない。遺構のプランや深さからみて井戸の可能性を考えていたが、井戸枠のプランは確認できない。埋土は黄色ブロック土を多量にふくんだほぼ単一の層であり、このような規模、埋土をもつ遺構は、昨年の20次で確認した館20SX315に類似がある。館20SX315からは白色系土師器片が出土しており、整地の切り合いから15世紀代の遺構の可能性が高い。館21SX090も同様の時期の可能性はあるが、ともに性格は不明である。また、調査区南側で東西方向の溝「館21DI170」を検出（写真14）。平面的には「茶褐色土」の下層で検出しているが、全体にプランの把握が困難であり、「茶褐色土」面より切り込んでいた可能性も残る。西端では完形の土師器環がまとまって出土しており、館12SB145などの掘立柱建物を区分する区画溝であろうか？

これらの事例を含めて、15世紀の遺構の性格を考えると、館中心部を主体に15世紀代の掘立柱建物跡やかわけ座遺構が複数確認される点、大規模な整地が存在する点からみて、大友館の東側は室町時代の太友氏と関連の深い建物が並び立っていた可能性が高い。ちなみに、昨年度調査を行った館20次調査で座標北に沿って南北、東西方向に設けたトレンチの中でも礎盤石を複数検出しているが、幅0.8mのトレンチ内では一つとして並ぶものがなかった。このことは、館中心部の15世紀代の建物も東西に振れる主軸をもつ建物の存在を想定させ、12次、21次の建物群との関連性が窺える。



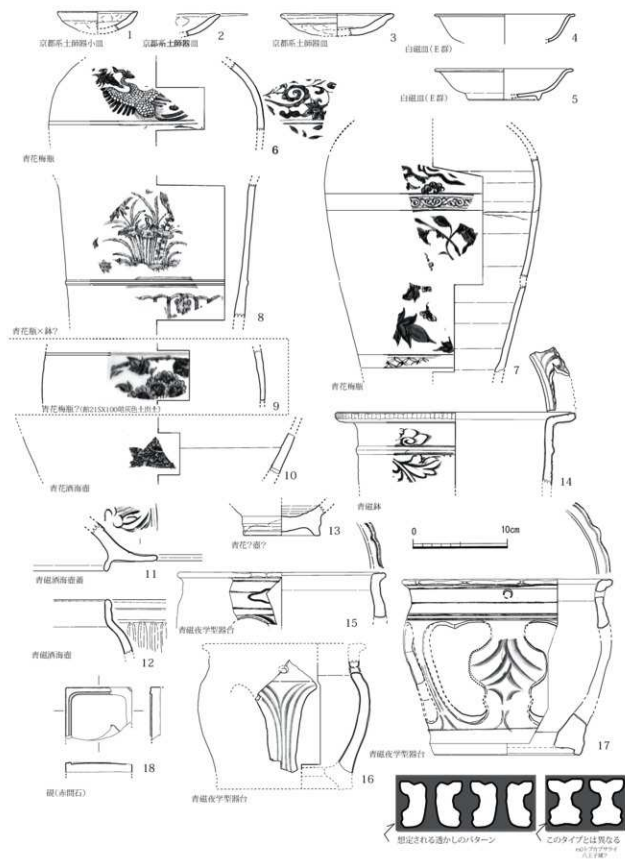
第8図 館中心部～東端 16世紀中頃の地形復原案模式図（東～西）

(4) 調査のまとめと今後の課題

調査のまとめとして、上記の所見をもとに12・16次調査を含めた館東端の遺構変遷を示す（第6・7図参照）。また、今後の課題として、2点をあげる。①互出土の意味：既に触れたが、今回の調査区はこれまでの館周辺の調査と比較して15世紀から16世紀の段階の瓦の出土が多く見られた。このことは館の東端に存在した施設（ex. 門など）の上部構造に関わるものである可能性があり、館東端の建物構造に注意する必要がある。②16世紀後半の地形復原：これまでの館中心部周辺の調査では、耕作痕跡の存在から館の遺構面はある程度の削平を受けていることが知られていたが、その削平がはたしてどの程度の規模で行われていたか判断する材料はなかった。館21SX220で検出した備前焼大甕は、遺構の機能が確定していないものの、底縁部から口縁部まで接合する資料であり、これを参考にして当時の甕の埋設標高を推測する事ができる。甕の肩部までが地中に埋没していた仮定すると、地表面の標高はL=4.7～4.8mとなるが、この標高は遺構の検出面の標高とほぼ同じである。したがって、遺構検出面は比較的、当時の地表面を保っていた可能性が高いこととなる。この解釈を元に当時の地形を模式的に示すと第8図のようになる。今回の事例をもって館の中心部～東部全体の地形復原が検証されたわけではないが、こうした仮説を今後の調査の際の目安とし検証を続けたい。

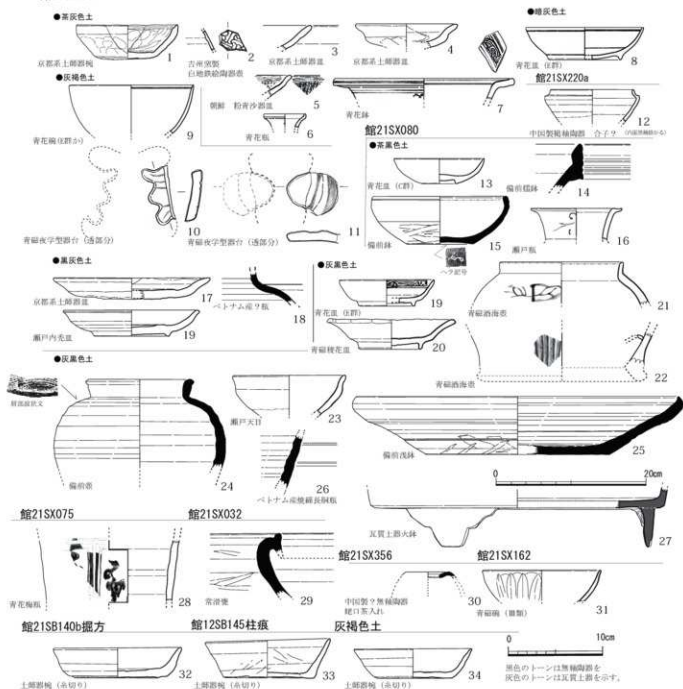
(5) 出土遺物について

今回の調査では、これまでの大友氏館跡でほとんど出土していない多様な遺物が出土している。15世紀代の土師器・小皿類とともに瓦類や青銅製品が出土した他、16世紀末の町屋段階の大型廃棄土坑【館21SX080】中からは京都系土師器のほか、青花碗、青磁皿、備前焼や瀬戸焼、朝鮮船徳利片、タイ・ベトナム産陶器、瓦質土器、瓦などが出土。また、SX220からは中国産と考えられる合子状の褐釉陶器が出土している。第9図はSX105の出土遺物中の8割程度を、第10図は主要遺構中の下限を示すもの、その他の遺構で希少なものを選択して図示している。遺物の種類はそれぞれの図中に記載し、ここでは主要なものに絞って報告する。館21SX105出土遺物：第9図～6・7は中国青花の梅瓶と考えられるもの。8は退化したラマ式甕を描き、その上部に一条の突帯をもつ中国青花で、上部がやや外反する。6・7・9とは異なり全面施釉されることから、瓶ではなく鉢の可能性が高いが類例の少ない器形である。10は傾きや形から酒海甕と考えられる。外面に牡丹文を描く。13は被熱のため釉調が変化している。瓶類の底部と考えられる。14は8と同様、全面施釉で、体部に突帯をまわした類例の少ない青磁。鉢か。15～17は青磁の夜学型器台と呼ばれるもの。17は破片より復原したが、底径15.2cm、口径22.3cmに復原でき、器高は各部位に接点が無いため想定となるが文様や透かしの形状から18.8cm程度となる大型品である。これに類する資料は国外ではトプカプサイ博物館所蔵のものが著名であるが、国内では八王寺城跡表採品。首里城京の内SK01、今帰仁城址などに出土例がある。当資料はこれらの製品と比較しても透かしの形状がやや複雑である。小野正敏氏の御教示によれば胎土や釉調からみて元青磁であり優品に属するものとのことである。なお15と17は口縁部の装飾や輪花の形状から別個体として図示したが、器形の複雑さを考えれば同一個体であってもよいかもしれない。SX100出土遺物：第10図～2は外面に勾連文と呼ばれる文様を描く吉州窯製の白地鉄絵陶器甕の体部片である。これとほぼ同一の破片が約20m南東に位置する中世大友府内町跡第52次調査でも出土している。全国的にも類例の少ない製品である。10・11は夜



第9図 館21SX105出土遺物 (1/4)

館21SX100 灰土色の前後関係については第5図SX100土層模式図参照



第10図 館21その他の主要遺構出土遺物 (1/4、21・22・25・27は1/5)

学型器台の透かし部分と考えられる青磁片である。これらを加えると館21SX105・100で出土した器台は4～5個体に上り、唐物威信財の一つとされる青磁器台が、梅瓶とともにまとまって出土した点は特筆される事象といえよう。以上、出土遺物の一部についてふれたが、今回は資料紹介に留め、詳細な報告についてはその他の遺物とともに今後の正式報告書の際に述べたい。(長 直信)

3. 万寿寺地区第5次調査

(1) 調査目的

調査区は万寿寺境内の推定伽藍中心軸上、万寿寺推定範囲のほぼ中央に位置する（第1・2図）。昨年度の4次調査（以下、万4）では、大規模な掘り込み地業遺構万4SX150を検出した。万4SX150は基礎などの構造物に関わる地業の可能性があるので、本年は万4SX150の範囲を確認するため、万4東端より5m東の位置に、東西5m、南北12mのトレンチ万5-1区を、東西に長い万4次調査区の中央部付近を重複させる形で、東西5m、南北16mの南北方向のトレンチ万5-2区を設定した。調査期間は平成20年8月12日～9月12日まで。調査面積は185㎡である。

(2) 調査結果

①【万4SX150の規模確認】

⇒万5-1区では万4SX150の東端は検出できず、結果「掘り込み地業状」の遺構は南北9m、東西は46m程度の範囲の遺構であることを確認。

②【万4SX150下層より巨大な東西溝万5-2SD080（幅5m以上、深さ2.0m）を検出】

⇒昨年の調査では一連と考えていた万4SX150の堆積層上層と下層に不整合面が存在する事が判明。昨年の4次調査のサブトレンチ1の土層の再考よりSD080の延長が存在する可能性高く、東西方向の溝と考えられる。

⇒万4SX150はSD080の堆積の窪みを再掘削して斜めに堆積するブロック土の層群を形成している。



第11図 旧万寿寺地区周辺調査位置図（1/5000）



第12図 旧万寿寺地区中心部調査位置図（1/1500）

③【万4SX150の北には16世紀後半の東西溝万5-2SD070(幅2.5m以上、深さ1.6m)を検出】

⇒4、5m北には町23次調査で確認した15世紀の整地範囲を囲む方形区画溝を検出しており、万5SD070と15世紀代の整地万4SX150と重複することなく掘削されていることを考えると、同様の区画溝の可能性がある。

④【南北方向の溝状遺構万5-1SD005を検出】

⇒深さや堆積状況などに差が大きく断定できないが、万5-2SD080の東側延長部である可能性がある。

⑤【万5-1SD005を切って完存する瀬戸焼水注が出土】

(3) 調査概要

調査の方法として、万4次調査同様、大型遺構を確認した地点には、堆積状況や遺物確認、および下層遺構の展開を把握するため、5地点にサブトレンチを設けた。基本土層は、万4次調査同様、調査地点は標高6.3mほどで、九州乳業の建物の位置とは重複しておらず遺構の依存状況は比較的良好であったが、厚さ0.5～0.6mもの厚いバスの層を除去すると、標高5.9m前後で水田層が現れ、この水田耕作により上部を削平される状態で、近世～中世の遺構を確認した。検出標高は5.6～5.5mである。遺構面も、万5-1・2ともに万4次同様上記の理由で大きく削平を受けるため、複数面は確認できなかった。

【万5-1】(第13図)

主な遺構：調査区を縦断するように万5-1SD005とした南北方向の溝状遺構を検出。南端では東方向と南方向へ二又に分かれるが切り合いは確認できなかった。14世紀～15世紀の遺物が出土する。また、調査区中央西端には、万5-1SX010とした不定形の遺構を検出。常滑焼甕など14世紀を主体とする遺物が出土した。SD005を切って、万5-1SX020とした瀬戸焼水注が横転した状態で出土している(第14図・写真16・44)。土圧のため把手部分が割れていたが完形品である(第15図)。類似する型式の水注は現在確認できていないが、後期様式のものだろうか。

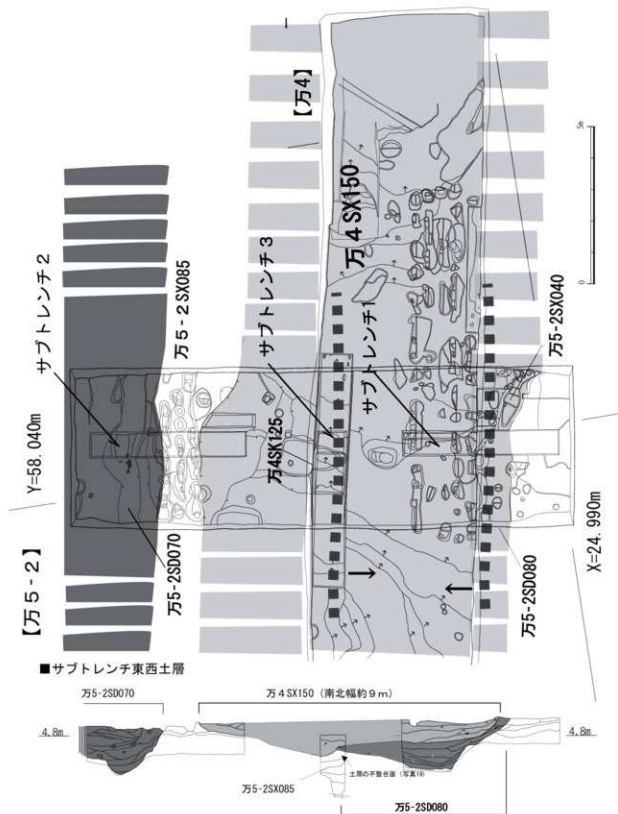
【万5-2】(第13図)

主な遺構：調査区北側で万5-2SD070を検出。幅2.5m以上、深さ1.6mを測る。やや厚手の京都系土師器や備前焼埴鉢(中世6期)が出土することから、16世紀後半頃に埋没した溝と考えられる。万4次で確認した万4SX150は、南北は調査区内で完結し、南北幅9mとなる。東側の万5-1では検出できないことから東西は46m程度の範囲に収まる可能性が高い。SX150は上層と下層で堆積状況の変化や層の不整合がみられることから、上層と下層は堆積契機の違いによる別遺構と捉えられる。上層の万4SX150は万5-2SD080を切ってブロック土を含むしまった灰色土、茶色土層で交互に埋めている。最大深さは0.7m程となる。下層遺構万5-2SD080は粘質層と砂層がラミナ状に堆積する遺構で、万4次調査の所見より東西方向の溝状の遺構と考えられる。最大深さは2.0mを測る(第16図)。両遺構からは多量の遺物が出土したが、万4SX150部分からは大量の平瓦・丸瓦とともに、鳥舎、鬼瓦なども出土している。白色系土師器や在地系の箱型土師器も多く出土し、15世紀に埋没したと考えられる。なお、全容は不明だが万5-2の中央トレンチではSD080の下層で粘質土とシルト層で埋没した堆積層万5-2SX085を確認した。土師器小片が出土するのみで時期は不明であるが、遺構の可能性はある。

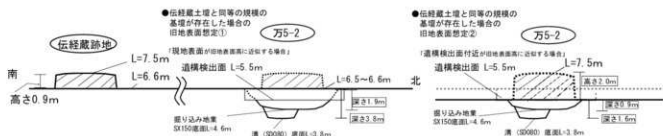
今回の調査では、コンテナ15箱分の遺物が出土した。出土遺物の多くは土器・瓦類である。また、常滑焼などの14世紀代の遺物の出土もみられた。

(4) 調査のまとめと今後の課題

既述したように、今回の調査では前回の4次調査で基壇の基礎の可能性を考えていた万4SX150の南北規模が約9mであることが判明した。この数値は当初想定していた基壇の基礎地帯としての規模よりも幅の狭い感があり、SX150の性格については、再考を迫られる結果となった。しかしながら、万4SX150の北端より幅僅か1mの間隔をもって掘削される東西溝万5-2SD070が検出され、埋没時期や規模、溝の方位からみて、およ



第16図 旧万寿寺地区第5-2次平面図 (1/120)



第18図 伝万寿寺土壇の標高と旧万寿寺地区第5次調査の標高比較模式図

そ8m北側にある調査区町23次で検出した方形区両溝との関連が考えられる(第17図)。万4SX150の上面に16世紀代の遺構が展開しない点を考えれば、万5-2SD070が万4SX150を囲む可能性もあり、今後は万5-2SD070がどのように巡るのかSX150の四隅の確認とともに重要な課題といえる。また、万4SX150下層で新たに認識した溝状の堆積状況を示す遺構SD080については、想定される長さや幅・深さとも巨大なものであり、15世紀段階の伽藍の様相は不明であるものの寺院跡とされる当地に開作された巨大な「溝」の存在は一見不可解に見える。この堆積が池なのか溝であるのかいずれにせよ深い遺構であることにはかわりなく、その解釈については苦慮するが、万5-2SD080の埋土については現在珪藻や花粉の分析を実施中であり、境内内部にめぐる深く巨大な溝の性格付けに寄与できるデータを期待しているところである。いずれにせよ、ここ2カ年の調査で万寿寺境内には予想に反して大型遺構が複数展開することが判明した。今後は、面的な確認調査において、その性格等について解明していきたい。

○中世万寿寺の旧地形について

旧万寿寺地区内に残る伝経蔵跡地の存在は、中世万寿寺の景観を残すほとんど唯一の遺構と考えられている。前回報告したように土壇自体の性格については諸説(土壇説・寺院施設の基礎説)あり、これらの評価については土壇自体の考古学的調査を踏まえた後に検討されるべき性格のものであるが、今回、基礎の基礎地業の可能性を考えていた万4SX150の幅や深さが確認でき、下層の溝状遺構万5-2SD080を検出したことを受けて、万寿寺中心部の旧地表面推定を目的に伝経蔵跡地を寺院の基礎に関わるものと仮定した上で土壇の標高や地表面標高を測り、今回の検出遺構との対比を行った(第18図)。伝経蔵跡地周辺の標高と調査地の現標高は、共に標高6.6m程度であり大きな差はない。この数値がどの程度旧地表面の標高を反映しているかは現状では判断できないものの、土壇自体は現地表面から頂部まで0.9mの高さをもつ。この数値をもとに土壇を万5-2区に重ねてみると、旧地表面の標高如何にかかわらず、SX150・SD080の深さが際立つ。仮に標高6.6mを旧地表面とすると、SX150は土盛りする高さ0.9mの倍の深さ(1.9m)の地業を行っていることとなる(第18図想定①)。この想定では、万5-1SX020の水注の出土位置は地表面よりかなり深い位置になってしまうなど、全ての遺構が大幅に深くなってしまい、埋土の堆積状況や遺物の出土状況からも現実的な数値とは考え難い。前回の4次調査では遺構検出面に座りのよい扁平な石が検出された事例もあり、また、160m南西に位置する万寿寺の西側堀上に位置する町34次調査で検出された16世紀後半の礎石の検出標高は4.9~5.3m、町43次で検出した16世紀後半の礎石建物の検出標高は4.8~4.9m前後である(第17図)。これらの礎石は万寿寺の堀の埋没後に、第2南北街路から一段低い地点で形成されており、周辺標高を直接反映するものではないが万寿寺周辺の景観復元として参考となる値である。万寿寺境内とその周辺地形が全て平坦であるという保障はないが、こうした事例を参考にすれば、遺構検出面と旧地表面にはさほど大きな(50cm以上の)標高差はみる必要はないのではなかろうか。ちなみに、遺構検出面標高5.5mを旧地表面標高とすれば、伝経蔵跡地の土壇は高さ2.0m程度となり、これにともなう地業万4SX150は0.9m程度の深さに、溝万5-2SD080の深さは1.6m程になる(想定②)。この高さ2mの土壇をどのように評価するべきか新たな課題が生まれるが、今後は伝経蔵跡地の考古学的な調査を待って検討したい。

万寿寺跡周辺は、近世以降の水田化にともなう削平が著しいと捉えられがちであるが、こうした旧地形の復元想定作業を踏まえつつ遺構の検討を続けたい。(長 直信)

第2章 中世大友府内町跡第82次調査

1. 調査に至る経緯

調査地点は、中世大友府内町における名ヶ小路町に位置づけられる。既往の調査と明治時代の地割りラインより、大友館北辺を通る東西方向の街路とそれに沿う町屋の存在が推定される地点である。今回、当該地において、遺構に影響を与えない内容ではあるが、個人住宅の建設工事が計画された。中世大友府内町の町割復原案を検証できる地点であるため、施工主の承諾を得て確認調査を実施する事とした。

2. 調査概要

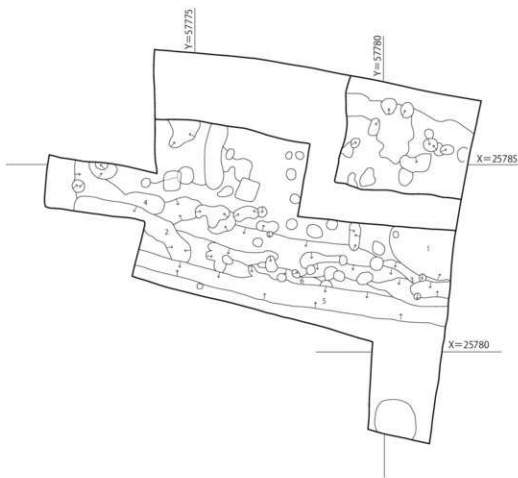
調査では、時期によって幅の異なる15世紀後半以降の道路状遺構が想定ライン上に検出された。また、町屋跡と推測される小規模なビット、土坑が道路沿いに密に分布することが確認された。SD005は道路状遺構上面で検出される遺構で、道路想定ラインと平行に走る溝である。位置的に該当期の道路北端側溝と推測され、埋土には焼土、炭化物が一定量含まれている。遺構の新旧関係より、SD005は、中世大友府内町最終段階の道路側溝と考えられる。SD005以北には、SD005よりも古い道路状遺構が面的に検出されていることから、SD005掘削以前の道路は、より北側に位置していたか、幅がより広がった可能性がある。本調査区は当時の道路を踏襲している地割り線よりも北に位置しているため、道路南端は検出されておらず、道路幅は不明である。しかし、道路幅が最大になる時期には、調査区内で幅5.4mに達している。SD005の掘削される最終段階には、調査区内で幅3.1mを測る。道路の時期を示す遺物として、道路構築層より、16世紀前半頃に比定される土師質の土器皿が出土している。また、道路構築以前の土坑より、15世紀前半から中頃に比定される土師質土器皿が出土している。従って、道路構築の開始は、15世紀後葉を上限とするものと考えられる。

この東西道路の延長部分は、周辺の調査で検出されている。調査区から約50m東の町4次調査地点では、調査区北端で町4SF190が検出されており、最下層の1期には2.1mと幅狭であるが、2期には幅5.0mまで拡幅する。しかし、3期になると縮小して幅3.5mになっている。このような変遷過程は本調査区の検出状況とよく似ている。町82SD005が町4SF190の3期にあたり、道路幅が縮小した事を示す遺構となる可能性がある。町82次調査区から約80m西の町72、12次調査区でもこの道路が検出されているが、この地点では中世大友府内町が島津氏に侵襲された後の、復興段階には幅約3～4mである。また、本調査で検出された道路北端が、町4次の道路北端の延長線上よりも北にずれている点が注目される。町4、82次の中間地点で、東西道路が北にクランクないし屈曲している、もしくは道路は主軸を逸えずに幅が拡張している、と推定できる。

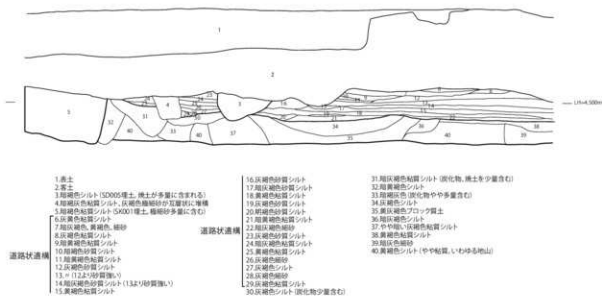
本調査区から約150m北の町1・2、町3次調査より、町1・2と町3次地点の中間に南北方向の道路の存在が想定されている。本調査区ではこの道路の検出も調査目的とし、西側への調査区拡張も実施したが、結局、南北方向の道路は検出されなかった。本調査区以西に存在する可能性もあり、この道路の確認については、今後の課題として残る事となる。(古川 匠)



第19図 町82次位置図
(1/5000)



第20図 町82次調査区略測図 (1/100)



第21図 町82次調査区東壁土層図 (1/40)

第3章 城原・里遺跡 12次調査

1. はじめに

(1) 調査に至る経過および調査の目的

城原・里遺跡は、大分市大字里に位置し、東西に延びる標高約40mの丘陵東端に所在する。調査を進めるに連れて、第2次～4次調査（旧遺跡名：中安遺跡）の様相と5次～9次調査地点で遺跡の様相が異なることから、遺跡範囲内の字名をとり、今後は旧中安地区周辺を「城原地区」、5次～9次調査区周辺を「里地区」と呼称する。

平成7年に民間開発にともなって1次調査を、平成10～12年に県道整備にともなって城原地区に所在する2・3・4次調査地点を行い、7世紀末～8世紀の官衙遺跡として広く周知された。その後、平成14年度に、市道の城原・里線道路拡幅工事にともなう第5次調査により、里地区にも7世紀後半～末に比定する官衙関連施設と思われる掘立柱建物跡が確認されたことをうけ、平成15年度より市内遺跡確認調査として継続的に調査を実施し、本年度で5年度目となる。平成18・19年度に実施した10・11次調査では3・4次調査で確認した官衙関連施設の範囲



第22図 城原・里遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第23図 城原・里遺跡の調査区位置図 (1/5,000)

確定のため調査地点を城原地区に移して調査を行った。

① 「里地区」における調査成果

これまでの調査から、古代の遺構は大きく5段階に変遷することが判明している。うち、1期～3期は、7世紀後半～末に比定でき、建物主軸方向を真北よりやや西に振る掘立柱建物跡が一定の規格性（L状もしくはコ字状）をもって配置・変遷することが確認されることから、全国的にも類例の少ない初期の官衙関連遺跡として注目されている。以下、時期区分の呼称については池邊千太郎2008「城原・里遺跡を解析する」『大分県地方史』第203号に従った。

② 調査目的

今回の調査は、これまでの調査で判明した「里地区」における建物遺構の北西部の様相把握を目的として7次調査A区の西側に2区、8次B区の北側に1区を設定し調査を行った。調査にあたっては、調査地に所在する指原鉄工所の協力のもと調査区を設定し、事前測量および本調査を実施した。調査は平成20年12月3日～12月26日にかけて実施した。

(2) 調査組織

調査指導者 小田 富士雄（福岡大学名誉教授）
調査指導 大分県教育委員会
調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬
調査担当 長 直信

2. 調査概要

(1) 基本土層

アスファルト舗装した面を除去すると、約0.4mの厚さでバラスが堆積し、その下部に約0.2mの粘土質の土、その下に柔らかい灰色土・腐食土が堆積していた。遺構面はこの腐食土を除去すると検出できる。1区では標高42.0m、2区では41.90mで遺構面が現れる。この遺構面は、地山である明橙色粘質土上に展開する。

(2) 1区の調査内容

掘立柱建物跡3棟（SB044、SB045、SB046）、竪穴住居跡の可能性のある遺構を2基（城12SH005、城12SH040）、ビット群を検出した（建物遺構の詳細については表1を参照）。城12SH005は住居の可能性のある南北2.0m×東西2.5mの規模を有する方形の遺構。深さ0.1m弱と浅い。時期を確定する遺物はないが、掘立柱建物跡に切られることから古墳時代の所産か。城12SH040は、調査区南東で一部を検出した遺構。遺構底面で壁溝を確認したことから住居と考えられ、半径5m以上の大型円形住居となろう。弥生時代中期～後期か。

(3) 2区の調査内容

1区では確認されなかった東西方向の畝の畝が全面に展開する。調査範囲が狭く建物の配置を確定するにいたらなかったが、城12SB025a・bとした柱穴を検出した。城12SB025aでは、掘方下層からは須恵器環G蓋が出土した（第24図）。SB025bは直径約1.0m近い大型の掘方をもつ柱穴。SB025aは深さ0.56m、SB025bは0.30mと深さに違いがあり、埋土の色調も違いがみられるため一連の遺構と断定してよいが、現状では不明である。



第24図 城12SX025a
掘方出土遺物 (1/3)

3. 調査のまとめと今後の課題

これまでの調査で判明した建物群の北西部の様相把握を目的として調査を行ったが、予想されていた1期～3期段階の東西建物に並ぶものは確認できなかった。しかしながら、2・3期に帰属する南北方向の建物SB044・SB045を検出し、北西隅付近にも建物遺構が展開することが判明した。なお、2区で検出した城12SB025aは、出

土遺物より1期～2期の可能性が高い。また、4期の遺構としては総柱建物SB046を検出し、SB033・SB028・SB027・SB029を含めて5棟の倉庫状の建物列が存在することが確認できた。

平成21年度に「里地区」の本報告書を刊行予定であり、調査の報告は概略のみに留めた。今後は「城原地区」を含めた遺跡全体の遺構変遷や同時性を検討する中で城原・里遺跡を評価する必要がある。（長 直信）

表1 掘立柱建物跡一覧表

次数	遺構名	規模 ()内は推定	柱間寸法 (桁行×梁行)	建物方位	身舎面積
12次	SB044	2間×3間、5.77m×3.85m	1.9m×1.72m	南北 N-4°-W	2.22㎡
	SB045	2間×3間、3.94m× (3.56m)	1.25m×1.78m	南北 N-2°-W	推定14㎡
	SB046	2間×2間、3.06m× (2.92m)	1.46m×1.45・1.6m	真北	推定8.9㎡



第25図 城原・里遺跡 (里地区) 遺構平面図 (1/800)

第4章 国指定史跡 千代丸古墳

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

国指定史跡 千代丸古墳は大分県を代表する装飾古墳である。千代丸古墳の初期の研究史については、昭和7年刊行の『豊府古蹟研究』第七冊に詳しく紹介されている（郷土史蹟伝説研究会1932『豊府古蹟研究』第七冊）。抜粋すると、千代丸古墳は、別府町長を務めた日名子太郎氏の調査により、初めて古墳である事が判明した。そして、大正10年頃の陸軍特別大演習の折、陸軍士官によって装飾古墳である事が発見された。その後、鳥居竜藏氏をはじめとする複数の考古学者が来訪し、昭和初期には文部省囑託であった「古谷某氏」が調査を行っている。（ちなみに、陸軍大演習が開催された当時の『大分新聞』には、大正9年11月1日ころに歩兵第35連隊が千代丸古墳付近を通じた事が報道されており、この時に発見された可能性がある。また、「古谷某氏」は、当時文部省に在籍し、全国各地の古墳を調査した古谷 清氏の事であろう。）

千代丸古墳の横穴式石室については、上述の『豊府古蹟研究』第七冊に図面が記載されており、近年、大分県教育委員会が実測及び写真撮影を行っている（大分県教育委員会1995『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92輯）。しかし墳丘については、昭和初期の段階で既に削平、改変が著しく、前出文献には「石塚のみ徒に大きく見える」と記述されている。本来の墳形及び規模を推定する材料は失われていたのである。昭和9年5月1日に国指定史跡となり、現在に至るまで地域住民の手によって大切に守られてきたが、石室を被覆する墳丘盛土は依然として脆弱であり、特に、石室西北隅付近は盛土の流出が著しい。長期的な保存が危惧されるこのような状況を受け、また、重要な歴史的意義を持つ古墳であるにも関わらず帰属年代が不明である現状をふまえ、平成19、20年度の二カ年にわたり、大分市教育委員会が国庫補助事業によって、墳丘形態、規模及び帰属年代の確認を当面の目的とし、調査を実施する事となった。

(2) 調査組織

平成19年度

調査指導 大分県教育委員会
調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬
調査担当 古川 匠・山下 朋紀

平成20年度

調査指導者 小田 富士雄（福岡大学名誉教授）
調査指導 大分県教育委員会
調査主体 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬
調査担当 古川 匠・山本 哲也

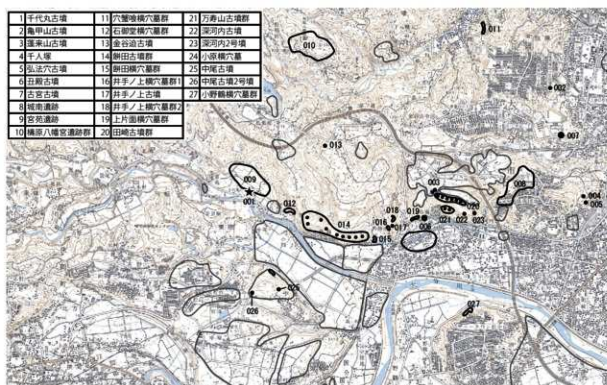
2. 歴史的環境

国指定史跡・千代丸古墳は、金谷迫丘陵の南裾部を流れる賀来川左岸の、河岸段丘上に位置する。大分市域では唯一の装飾古墳であると共に、市内では最大規模の横穴式石室を有する。大分県を代表する古墳の一つである。

千代丸古墳の立地する金谷迫丘陵とその周辺には、首長墳が点在している。前期の亀甲山古墳は破壊され消失しているが、三角縁神獣鏡が出土している。蓬萊山古墳は全長約80mの前方後円墳で、箱式石棺を主体部とする。中期古墳は確認されていないが、後期の首長墳は、金谷迫丘陵を含む大分川左岸地域に移動してくる。大字永興に所在する千人塚古墳は、大分平野最後の前方後円墳である。近接する弘法穴古墳は、屍床を有する横穴式石室墳である。大字上片面に所在する丑殿古墳は家形石棺を納める横穴式石室で、千代丸古墳と同一の丘陵南裾部に立地する。大字三芳に所在する古宮古墳は九州唯一の石棺式石室で、「日本書紀」に記される大分君恵尺の墓と想定されている。城南遺跡では、古代の火葬墓の可能性のある遺構が発見されている。

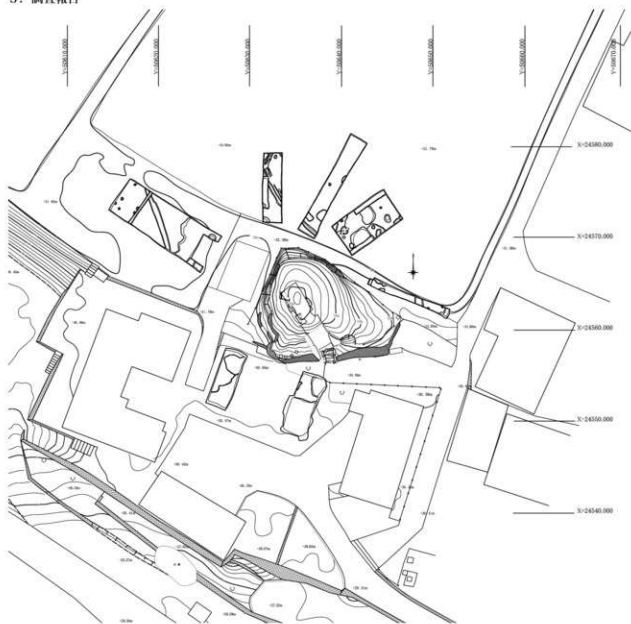
大分市域で横穴式石室を有する古墳は千代丸古墳、丑殿古墳、弘法穴古墳、古宮古墳の4例のみである。いずれも単独墳であり、規模、構造も比較的大型であることから、古墳時代後期から終末期にかけて、大分平野を代表した累代の首長墓と考えられる。千代丸古墳、弘法穴古墳、丑殿古墳は横穴式石室の形態、構造が同一の系譜上に無く、これらの首長墳の前後関係は、現況では未確定である。畿内系石棺式石室を採用する古宮古墳は、千代丸古墳よりもやや年代の下がる古墳時代終末期に位置付けられる。

宮苑遺跡は鎌倉末から室町期の遺跡で、建物十棟、塀、井戸、長大な溝、道路等が検出され、荘園領主または武士の居宅と評価されている。建物等の遺構配置が千代丸古墳に極めて近く、敷地内に千代丸古墳を取り込んでいるかのようである。位置関係より、千代丸古墳を居宅内の築山と見立てた、とする論もある（大分市史編纂委員会1987大分市史中巻）。千代丸古墳の、古墳時代以降の歴史を検討する上で重要な遺跡である。



第26図 千代丸古墳周辺遺跡地図

3. 調査報告



第27図 千代丸古墳調査区位置図 (S=1/400)

(1) 平成19年度の調査 (第1次)

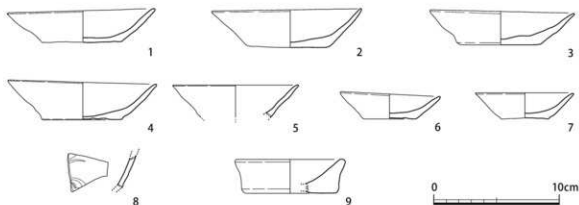
調査の初年度となる平成19年度の第1次調査では、墳丘西側に1カ所、墳丘南側に2カ所の調査区を設定した。西より、第1～第3トレンチとし、報告する。

第1トレンチ (千代丸1-1)

第1トレンチは墳丘西側の平坦面に設定した。東西長約10m、南北長約4mの、東西方向の調査区である。現地表面標高は約31.8～31.9mで、遺構検出面標高は約31.5～31.6mである。表土、水田基盤層の下には暗褐色シルト層 (SX006) が部分的に堆積している。遺物包含層であり、15世紀前半頃に比定される土師質土器環が出土している。調査区東端部で、SX006上面より土師質土器環、青磁片を廃棄した土坑 (SK003) を検出した。

SK003は出土遺物の年代から15世紀後半頃に比定される。この他に、土師器質土器片が出土するビットが、少数検出されている。

SX006直下では、黄褐色砂質シルト層 (SX007) がほぼ全面に検出される。薄い堆積層で、直下からは河岸段丘の堅固な礫層が現れる。SX007は堆積状況と土質より、「地山」と判断される。SX007で、溝状遺構を調査区東端付近で検出した (SX005)。SX005は幅1.8m、深さ0.45mの、南北方向の溝と推定され、埋土には多量の礫が含まれている。填丘との位置関係と遺構の方向より、千代丸古墳周壕と推測される。但し、遺物は一点も出土していない。

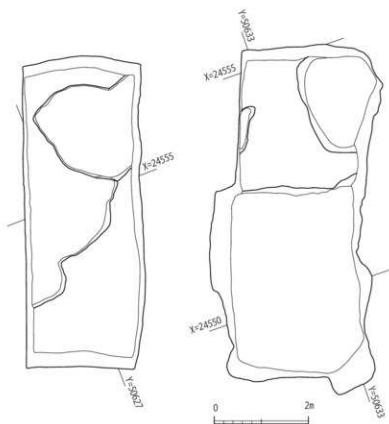


第29図 千代丸1-1 出土遺物実測図 (S=1/3)

SX005は填丘復原の材料として評価できる。しかし、SX005から現存填丘に至る範囲には古墳盛土の残存が確認できなかった。SX005の直上には、中世の堆積層SX006が水平堆積し、調査区東端まで延びている。また、SX006で検出される中世の廃棄土坑SK003は、周壕状遺構SX005よりも填丘側に位置している。すなわち、少なくとも15世紀段階には千代丸古墳填丘西裾部は、現代とほぼ同じ地点まで削平を被っていたようである。

千代丸1-1 出土遺物

第29図は千代丸1-1 出土遺物実測図である。1～8はSK003出土遺物である。1～7は土師器質土器片で、底部から口縁部に向って直線的に外反する。底部は糸切りが施され、色調は橙褐色を呈し、ロクロナデ調整で仕上げられてい



第30図 千代丸1-2・1-3 平面図 (S=1/80)

る。現在の編年では15世紀後葉に位置付けられる。8は器種不明青磁片である。おそらく碗か。内面にヘラ描き文様が施される。9はSX006出土の土師質土器片である。直立傾向で器壁が厚い。15世紀前半段階の所産か。

第2・3トレンチ（千代丸1-2・1-3）

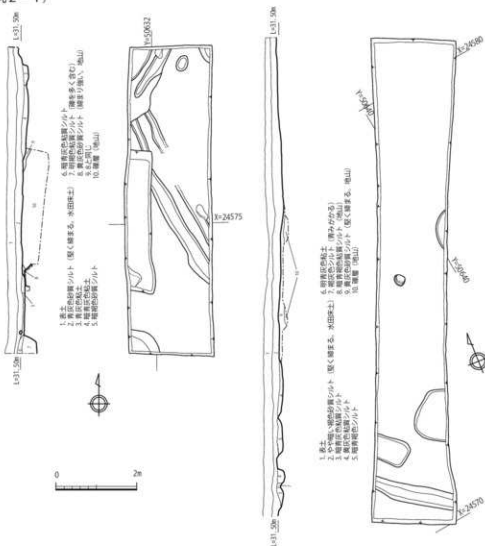
第2、第3トレンチは墳丘南側に平行して設置した、南北方向の調査区である。両調査区とも、遺構は全く検出されなかった。また、墳丘盛土の存在も確認されなかった。横穴式石室の浅道部床面標高は約31.5mであるのに対し、横穴式石室が開口する墳丘南側の現地表面標高は約30m、表土掘削後の標高は約29.5～29.7mと低い。堆積層も表土直下で礫層が姿を表し、第1トレンチの調査で「地山」と評価した黄褐色砂質シルトは検出されなかった。従って、墳丘南側は全面的に削平を受けており、このために墳丘盛土及び周壕が検出されない、と判断される。

② 平成20年度の調査（第2次）

平成19年度の調査成果を受けて、平成20年度の第2次調査では、墳丘北側および東側に4ヶ所の調査区を設定した。西より第1～第4トレンチとする。全地点は現在、水田である。現地表面標高は31.8～31.9mで、平成19年度第1トレンチとほぼ同じ標高である。土地利用状況も同じであることから、千代丸古墳に伴う遺構の残存が期待された。

第1トレンチ（千代丸2-1）

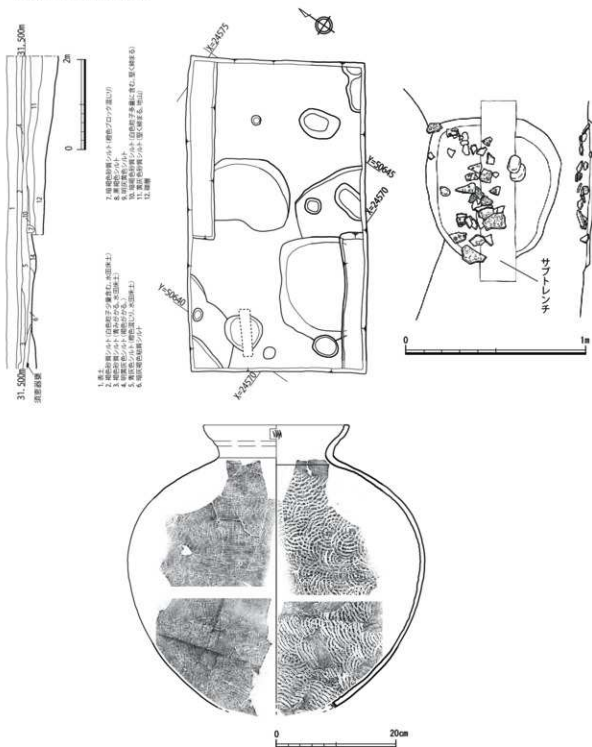
南北方向のトレンチである。表土下約0.4mで黄褐色砂質シルトが露出する。近世以降の溝が検出された以外、明確な遺構は存在しない。礫を多量に含む堅固な土層が周壕の想定線上で帯状に検出され、周壕埋土の可能性があるので、サプトレンチ状に断ち割りを実施した。その結果、黄褐色砂質シルトが途切れて下位の礫層が露出した状況である事が確認された。



第31図 千代丸2-1・2-2平面・断面図 (S=1/80)

第2トレンチ (千代丸2-2)

南北方向のトレンチである。周壕が弧状に巡ることを想定し、全長約12mのやや長大なトレンチとした。表土下0.4mで黄褐色砂質シルトが露出する。東西方向の小規模な溝が調査区南端で検出されたが、現墳丘に近接しすぎ、また他のトレンチでこの溝の延長部が発見されておらず、周壕とは想定しにくい。第2トレンチでも、第1トレンチと同様に帯状の層相が検出されたが、断ち割りの結果、こちらも下位の層相が露出した状況であることが確認された。



第32図 千代丸2-3 平面図 (S=1/80)・裏出土状況図 (S=1/30)
須恵器甕実測図 (S=1/6)

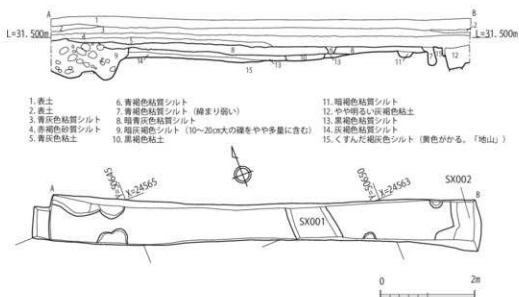
第3トレンチ (千代丸2-3)

南北方向のトレンチである。他のトレンチとことなり、浅い土坑が複数検出されたが、周壕は確認されなかった。第3トレンチからは、須恵器甕が1個体分出土した。帰属年代として、6世紀後半から末頃に比定される。横穴式石室の时期的な位置付けと矛盾が無く、千代丸古墳造営段階の祭祀に伴って、墳丘上や墳丘端部に供献された甕と推測される。残念ながら、古墳造営に確実に伴う遺物であるか不明である。というのも、浅い不定形の土坑内で検出されたものの、出土状況は廃棄状況を示していた。また、現存する墳丘に非常に接近した地点で出土しており、想定される墳丘範囲よりも完全に内側である。また、須恵器甕の破片は近隣の土坑からも出土しているが、中世の土師質土器坏が共存している。従って、中世かそれ以前の段階で墳丘は削平を被っており、須恵器甕は、原位置から二次的に移動した遺物と考えられ、多大な評価はできない。とはいえ、千代丸古墳に帰属する可能性のある遺物の出土は初の事例となることから、一定の資料的価値を有する遺物である。

第32図1は千代丸2-3SK005出土須恵器甕である。口径24.2cm、残存器高47.0cm、胴部最大径50.0cmである。本来の器高は約50cm程度的小型甕であろう。口縁部から頸部にかけてロクロナデが施され、無文である。胴部外面は平行タタキのち水平方向カキメを施す。胴部内面には同心円文タタキが施される。口縁部内面にはヘラ記号が施されるが、爪で縦方向に掻いたような単位がジグザグに連続するような形状である。形態的特徴とヘラ記号が施される事から、古墳時代の須恵器である事はほぼ確定視され、千代丸古墳造営段階に帰属する可能性が高い。この資料については、小田富士雄氏に実見いただき、6世紀後半から末頃に比定される、とのご指導をいただいた。

第4トレンチ (千代丸2-4)

東西方向のトレンチである。上述の3地点を墳丘北側に設定したのに対し、墳丘東側に設定した。周壕の可能性がある遺構が調査区中央部と調査区東端の2箇所で検出された。中央部の溝状遺構SX001は、幅0.8m、深さ0.1mである。浅く、礫層まで掘り抜かない。東端部のSX002は幅0.5m以上、深さ0.4mと安定しているが、平面形態が複数の土坑が切り合った状態のようにも観察できる。土層の検討より、墳丘盛土は検出されなかった。古墳時代以降の土地利用によって完全に削平されたようである。第4トレンチは非常に幅の狭い調査区であるため、SX001またはSX002が溝状に延伸するかは不明であり、周壕が否かの精密な検証は今後の課題として残る。

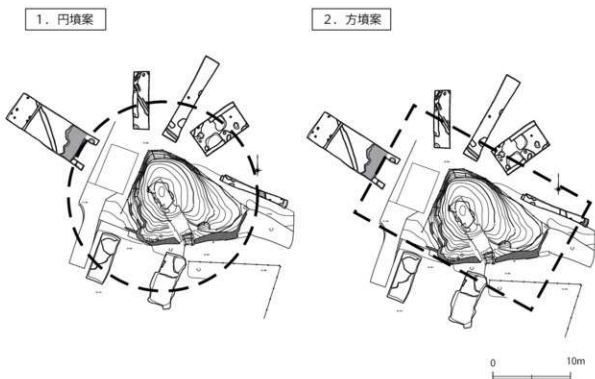


第33図 千代丸2-4 平面図・土層図 (S=1/80)

平成20年度には4ヶ所の調査区を設定したが、墳丘北側に設定した第1～3トレンチでは周壕が検出されなかった。各トレンチにおける地山の検出標高及び堆積状況からは、周壕を完全に破壊する程の大規模な地山の削平が後世に行われた、とは想定しがたく、墳丘の北側には本来的に周壕が形成されていなかった可能性がある。また、墳丘の東側に設定した第4トレンチでは、また、墳丘基部盛土の残存が期待されたが、平成19年度調査区を含む全調査区で、墳丘盛土の堆積は確認されなかった。墳丘想定ラインの内側で中世の遺物が出土していることから、中世以前に地山まで削平を被っているようである。

4. まとめ

平成19年度、平成20年度の2カ年計画で千代丸古墳の確認調査を実施し、計7ヶ所の調査区を設定した。千代丸古墳の周壕と比定される遺構は、平成19年度第1トレンチ（千代丸1-1）、平成20年度第4トレンチ（千代丸2-4）の2ヶ所で検出された。この2つの調査区は横穴式石室を挟んで墳丘の東西軸上に位置することから、墳丘の東西長さは最低でも約25m以上となる事が判明した。また、原位置を保っていないとはいえ、千代丸古墳に伴う可能性のある須恵器甕が出土したことは、調査目的である時期確定に資する成果である。しかし、千代丸2-4では周壕の可能性のある遺構が調査区中央部と東端の二ヶ所に存在し、いずれも規模が小さく、どちらが本来の周壕であるのか、判然としない。



第34図 千代丸古墳墳丘規模・範囲想定復原図 (S=1/500)

平成19、20年度の確認調査からは、千代丸古墳の墳丘形態を確定するに至らなかったが、2ヶ所で検出された周壕の位置関係と、現在の古墳の残存状況からは前方後円墳とは想定し難く、円墳ないしは方墳と考えられる。

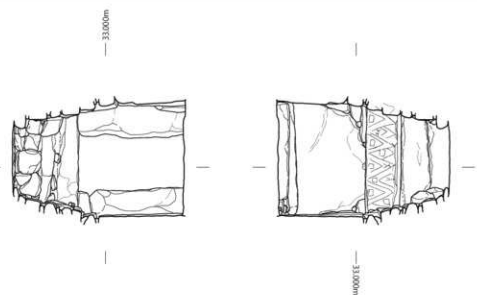
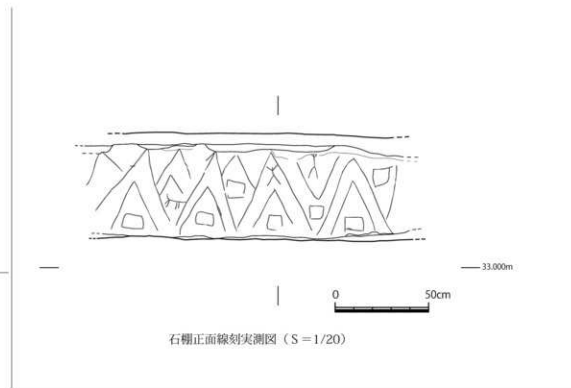
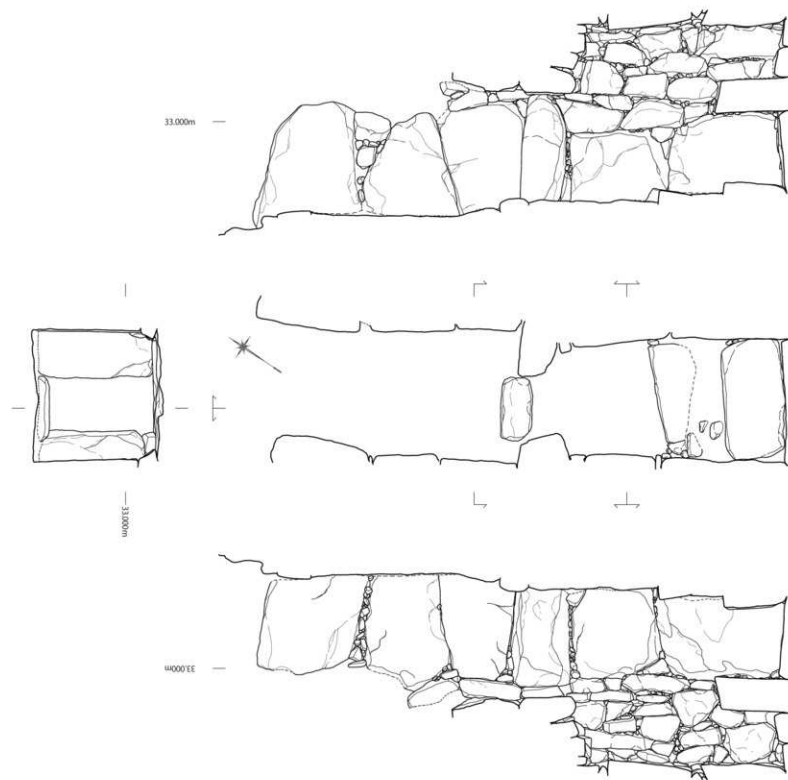
上述の通り、千代丸2-4では周壕の可能性のある遺構が2ヶ所存在するが、千代丸2-1の溝状遺構は平面形態、深さから千代丸古墳の周壕と目される遺構である。この遺構と石室との位置関係を目安に墳丘形態の復原を試みる。第一に、円墳と想定した場合、通常の横穴式石室墳が玄室中央部または奥壁中央部が墳丘の中心となることを考慮して復原してみると、第34図1のように、全長25mの円墳に復元される。この場合、千代丸2-4中央部のSX001を通る事となり、調査の成果に矛盾無く、復原する事が可能である。また、千代丸2-3で出土している須恵器甕の出土地点は完全に墳丘内部に位置する事となり、二次的に移動した遺物と考えられる。

第二に、方墳と想定した場合、平成19年度第1トレンチ溝状遺構を西辺に通るような方形が描かれる。千代丸1-1は南北幅約4mの範囲にわたる調査区であるため、溝状遺構の主軸方向が凡そ推測できる。この主軸方向に即した方墳を復原すると、第34図2のようになる。この場合、墳丘の中心を横穴式石室中央部に定めると、方形の東辺は、千代丸2-4東端のSX002を通る事となる。ただし、この案の問題点は、横穴式石室主軸方向と墳丘の主軸方向が全く合わなくなる点である。

あくまで限定的な確認調査成果からの復原ではあるが、平成19、20年度の調査成果からは、円墳案が蓋然性の高い復原案と考えられる。

今回の調査では、横穴式石室の3Dレーザー実測及び図化を行った。千代丸古墳の横穴式石室は、これまでに広く知られている事ではあるが、大分市域では唯一の装飾古墳で、そして奥壁中央部に石棚が配置される特徴を有する。石棚の全面には、線刻で複雑の連続三角文を描き、その間に人物や動物を描いている。玄室石材には赤色顔料が塗布されるが、羨道部石材のごく一部にも赤色顔料が残存しており、玄室だけでなく、横穴式石室全体が赤色顔料で彩色されていた可能性が有る。

石室は南南東に開口する。全長4.3m、玄室部分は長さ1.7m、幅0.95m、羨道部は現存長2.1m、幅1.0mの横穴式石室である。羨道部は縦長の石材を一列に立てる。玄室左側壁の最下段石材は羨道部の石材と、水平に目地をそろえて配置されており、その上に積まれる石材は垂直におおよそ目地を描いて積まれている。対照的に、玄室右側壁の最下段石材は羨道部と目地を違えており、上に積まれる石材は、垂直方向に目地をそろえていない。また、石室の四隅のうち、三隅に力石が配される特徴を有する。奥壁の上から2段目の石材は左上隅を打ち欠き、右側壁石材と組み合わせられている。指導者の小田富士雄氏からは、古い段階の終末期横穴式石室と評価できる、とのご指導をいただいた。第32図1の千代丸2-3SK005須恵器甕と同時期に比定される石室であり、この点からも、同須恵器甕は千代丸古墳に帰属する可能性が高いと言える。今回のレーザー測量によって得られた、横穴式石室3Dデータについては、今後、普及啓発を含めた活用を模索していきたい。(古川 匠)



第35図 千代丸古墳横穴式石室実測図 (S=1/60)

遺構写真1（大友氏館跡第21次）



写真1 大友氏館跡全景（南西上空より）



写真2 館21次調査区北東部遺構掘り下げ状況（上が北）



写真3 館21SX100礎面検出状況（東より）



写真4 館21SX220掘り下げ状況（東より）



写真5 館21SX220a・b堆積状況（東より）
SX220の上層にはSX105に由来する焼土を多く含む



写真6 館21SX220・SX100掘り上げ状況（東より）
SX100の下からはピットを検出



写真7 館21SX220裏内埋土除去状況（東より）
裏の内面底部付近には白色物質が付着



写真8 館21SX105・SX220c堆積状況（北西より）
上部の埴土層部分がSX105。灰茶色土以下の層がSX220cの埴土

遺構写真2 (大友氏館跡第21次・旧万寿寺地区第5次)



写真9 館21SX105陶磁器出土状況（北西より）



写真10 館21SB140b土師器出土状況（北より）
掘方内より完形の土師器環が出土。下に見える石は礎盤石



写真11 館21サブトレンチ4[東西堆積状況（北より）
向って左に見える灰色の不整合ラインはSD305埋土



写真12 館21サブトレンチ1[南北]堆積状況（北西より）
最下層は中世段階の基盤層「黄色土」。その上層に「黄灰色土」・「灰褐色土」層が堆積



写真13 館21サブトレンチ6[東西堆積状況（北西より）



写真14 館21SD170遺物出土状況（西より）



写真15 万5-1遺構検出状況（南より）



写真16 万5-1SX020遺物出土状況（南より）



写真17 万5-2遺構掘り下げ状況（北より）

遺構写真3 (旧万寿寺地区第5次・中世大友府内町跡第82次)



写真18 万5-2遺構検出状況（北より）
手前の黒色土のプランはSD070埋土。



写真19 万5-2サブトレッチ3堆積状況（西より）
不整合面の上下でSX150とSD080に分かれる



写真20 万5-2サブトレッチ3
堆積状況（南西より）



写真21 万5-2サブトレッチ1堆積状況
上層の茶色土部分は万4SX150、下層の
灰色土部分は万5SD080



写真22 万5-2サブトレッチ1 万5-2SD070堆積状況



写真23 町82次調査区検出状況（西より）



写真24 町82次調査区検出状況（北より）



写真25 調査区東壁土層（北西より）

遺構写真 4（千代丸古墳）



写真26 千代丸古墳調査区全景合成写真（北が上）



写真27 千代丸 1-1SX005完掘状況（南より）



写真28 千代丸 1-1SX005南壁土層（北より）



写真29 千代丸 1-1SK003遺物出土状況（南より）



写真30 千代丸 1-2 全景
（南より）



写真31 千代丸 1-3 全景
（南より）

遺構写真 5 (千代丸古墳)



写真32 千代丸2-1 全景(南より)



写真33 千代丸2-2 全景(南より)



写真34 千代丸2-4 全景(東より)



写真35 千代丸2-3 全景(南より)



写真36 千代丸2-3SK005遺物出土状況(南より)



写真37 千代丸2-3SK005半截状況(東より)



写真38 千代丸2-4SX001.SX002(南西より)



写真39 千代丸2-4SX001北壁(南より)



写真40 千代丸2-4SX002北壁(南より)

遺物写真



写真41 館21SX105出土青磁夜学型器台



写真42 館21SX105出土青磁鉢?



写真43 館21SX105出土 青花瓶類



写真44 万5-1SX020出土 瀬戸水注



写真45 千代丸1-1SK003土師質土器環



写真46 千代丸2-3SK005 須恵器裏(外面)



写真47 千代丸2-3SK005 須恵器裏(内面)



写真48 千代丸2-3SK005 須恵器裏ヘラ記号

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおいたし しなにいせきかくにんちょうさがいほう							
書 名	大分市 市内遺跡確認調査概報 ― 2008年度 ―							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ーズ 名								
シ リ ーズ 番号								
編 著 者 名	古川 匠・長 直信							
編 集 機 関	大分市教育委員会							
所 在 地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 TEL (097) 534-6111							
発 行 年 月 日	西暦2009年3月31日							
ふ り が な 所 取 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調査原因
おおいたしなかふもと 大友氏館跡第21次	大分市顕徳町	44201	201347	33°13'36"	131°37'15"	2008.05.26～2008.08.26	523㎡	確認調査
きゅうきんじのくに 旧万寿寺地区第5次	大分市大字大分字上井東	44201	201052	33°13'25"	131°37'22"	2008.08.12～2008.09.12	185㎡	確認調査
ちゅうだいふくふく 中世大友府内町跡第82次	大分市錦町	44201	201051	33°13'51"	131°37'12"	2008.08.20～2008.08.20	61.3㎡	確認調査
じょうはるさといやき 城原・里遺跡第11次	大分市里	44201	201225	33°13'44"	131°44'17"	2007.12.03～2008.12.26	115.4㎡	確認調査
ちよまるこふん 千代丸古墳第1次	大分市大字宮苑字千代丸	44201	201016	33°13'13"	131°32'35"	2007.12.00～2008.01.00	73.7㎡	確認調査
ちよまるこふん 千代丸古墳第2次	大分市大字宮苑字千代丸	44201	201016	33°13'13"	131°32'35"	2008.11.00～2008.11.00	76㎡	確認調査

所取遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
大友氏館跡第21次	居館跡	中世	掘立柱建物・裏埋設遺構・溝	京都系土師器、在地系土師器、青花瓶類、青磁 壺類、備前播鉢、銅製品	
旧万寿寺地区第5次	寺院跡	中世	大規模整地痕跡・溝	京都系土師器、在地系土師器、瓦類、瀬戸水注	
中世大友府内町跡第82次	集 落	中世	道路遺構・ビット群	京都系土師器、中国産陶磁器	
城原・里遺跡第12次	集 落	古代	掘立柱建物	須恵器・土師器	
千代丸古墳第1次	古 墳	古墳・中世	古墳周壕・土師器廃棄遺構	在地系土師器	
千代丸古墳第2次	古 墳	古墳・中世	古墳周壕	須恵器	

要 約	大友氏館跡第21次調査では、15世紀代の掘立柱建物を検出した他、16世紀後半頃の焼土堆積層中より、唐物威 信財と考えられる高嵌陶磁器類が複数出土した。また、16世紀代の備前焼大裏埋設遺構を検出し、館東端の 具体的な場の利用を知る事が出来た。旧万寿寺地区第5次調査では、16世紀後半の溝を確認した他、掘り込 み地業状遺構の根拠を確認。この下層では15世紀代の大溝を検出した。中世大友府内町跡第82次調査では、 大友氏館跡の北辺を通る東西方向道路の東側延長部分を検出した。城原・里遺跡第12次調査では、官衙関 連施設の北西部分の掘立柱建物を3棟検出した。千代丸古墳第1次調査では、千代丸古墳周壕、中世の土師 器廃棄遺構が確認された。千代丸古墳第2次調査では、千代丸古墳遺構段階に比定される須恵器裏が出土し た。また、千代丸古墳周壕が検出され、千代丸古墳の墳丘規模が凡そ確定された。
-----	---

大分市市内遺跡確認調査概報 2008 年度

国指定史跡大友氏遺跡

大友氏館跡第21次調査

旧万寿寺地区第5次調査

中世大友府内町跡第82次調査

城原・里遺跡第12次調査

千代丸古墳第1・2次調査

平成21年3月31日

発 行 大分市教育委員会

大分市荷揚町2番31号